

追 悼

渡邊貴介50周年史編纂委員会副委員長を偲ぶ

渡邊貴介教授を悼む

東京工業大学名誉教授

(株)アイ・エヌ・エー 鈴木企画計画研究室特別顧問

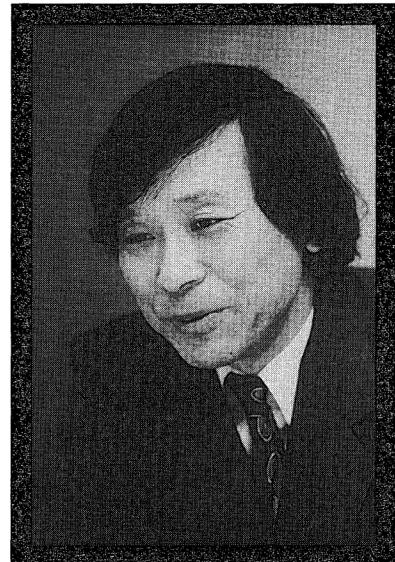
鈴木 忠義

渡邊貴介教授は一年余の闘病の甲斐もなく、本年8月18日自宅で逝去されました。享年58才でした。ご本人もさぞかしご無念であったことでしょう。私達も残念でなりません。謹んでお悔み申し上げます。

渡邊君は東京大学理科Ⅰ類に入学され、教養部から、当時(1964.4)新設された工学部都市工学科を選んだ一期生です。学部・大学院修士課程・博士課程に進学されました。私は新前助教授として、新分野の観光・地域・景観研究室を開かさせていただきました。戦後も20年たち、新しい学科とはいえ、大家の先生方の研究室も多いなか、研究業績も資料も教材もない、名ばかりの研究室に渡邊君は唯一人卒業研究をしたいと訪れてきました。1965年3月で、この時から私との共同研究が始まりました。

1968年4月渡邊君は博士課程に進学、修士論文を都市計画学会論文集に投稿し終えた時がありました。総理府の観光政策審議会の専門委員会の書記役をお願いし、引き受けさせていただきました。専門委員は西山卯三、川喜田二郎、角本良平、加藤秀俊、伊藤善一の諸先生方であり、私もその末席を汚しておりました。2年間におよぶ討論で答申案ができ上りました。内容は観光レクリエーションの基本論と、政策提言の整ったものであり、政策実現をも含め、今日でも評価されております。渡邊君はこの2年間の書記役を完全なまでに果し、自身も新しい分野の確固たる基礎的学殖をつけたのであります。

書記役の仕事は、討論内容のまとめと、次回での説明で、実に要を得ていて、専門委員会の進展に大きく寄与していたのでありました。専門委員の先生方からも渡邊君は賞賛されました。



本会理事 渡邊貴介氏におかれましては、
平成13年8月18日永眠されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

その時、私は渡邊君に深く謝る事態が発生していました。博士論文が遅れてしまったのです。渡邊君は新分野の研究で「専門委員の先生方から、直接多くをご教示いただいたことは、何よりも替え難いことで、幸せです。論文はこれから頑張ります」と即座に答えてくれたのです。私は渡邊君の才智のすばらしさはもとより、誠実さ、優しさに心打たれ、感動しました。

渡邊君の観光レクリエーション研究のすばらしい進展は論文、著書、各種委員会の活動に顕著であります。とくに近年、この分野への関心が各方面から高まり、渡邊君はその先駆的役割を果たしておりました。リゾート開発研究会、観光研究学会、都市観光を創る会などの設立発起人、理事などの役職を引き受け、その推進役としての活躍は見事でした。それゆえ、この分野では、なくてはならない人だったのです。多くの人達から渡邊觀光学の提唱を待望されていたのです。その矢先の渡邊君の訃報でした。

渡邊君も無念のきわみであったでしょう。私達も悲しみに打ちのめされています。心からご冥福をお祈り申し上げます。

渡邊貴介先生の足跡と人柄

東京大学先端科学技術研究センター教授

大西 隆

本学会理事、都市計画学会50周年記念号（本号）編集副委員長の渡邊貴介先生が、2001年8月18日に、58歳でご逝去されました。

渡邊先生は読書家でした。ご一緒に職場で過ごした長岡での1年間、「とき」で東京へ出張する折りなどに、いつも文庫本を取り出して読んでおられました。ある時書名を見ると、イザベラ・バードの「日本奥地紀行」でした。浅学にしてその本のことを知らなかった私は、早速購入し、なるほど外国人による紀行文を通して、比較論的に日本の都市を客観視できるのだと知りました。それから時々先生の携行書を参考に本を買ったものです。

渡邊先生は、また形式にとらわれず直言し、核心を明らかにされました。私などは、他の参加者が気を悪くするのではないかと内心心配することもあったのですが、みなが得心して受け入れたのは、発言に説得力があるためですが、同時に先生の天性の優しさゆえでした。

渡邊先生は、1943年に熊本市で生まれ、熊本高校ご卒業後、66年に東京大学工学部都市工学科を第1期生として卒業し、その後、大学院を経て、71年に東工大の社会工学科助手に着任されました。73年にはラック計画研究所に移り、76年に東京大学工学部土木工学科講師に就任されました。その後、同助教授、英国エдинバラ大学客員教授を経て、80年に長岡技術科学大学助教授、82年に東京工業大学社会工学科助教授に就任されました。86年に同教授に就任し、94年には大学院情報環境学専攻に移り、そして99年から東工大の評議員の要職を務められてきました。最後の職場となった東工大に着任されてから既に19年余の永きに及びますが、それ以前には、コンサルタントとして活躍されたり、長岡や英国など東京を離れて、教育と研究に携わったり、多彩なご経験を積まれたことが、権威にとらわれない、温かみのある学風やお人柄につながったのかも知れません。

この間、多くの論文、著作を執筆し、とくに都市計画学会の論文集には、観光・リゾート計画学を構成する多角的でかつ深い視点から多くの論文

を発表され、この分野での研究発展の中心になってこれました。同時に、89年からは、本学会常務理事として、文献委員会委員長、編集委員会委員長、総務企画委員会委員長を歴任され、本学会の活動を支えてこられたほか、日本観光研究学会常務理事も務められました。また、社会的には、観光政策審議会、北海道開発審議会、財団法人日本交通公社、京都和風迎賓施設基本計画委員会、東京都観光事業審議会、東京都事業評価委員会、福島県建築文化賞審査委員会など数多くの審議会や委員会に、専門的立場から携わり、委員長としてまとめ役を務める機会も少なくありませんでした。

私が、初めて渡邊先生を知ったのは、先生が東大土木の助教授をされていた頃、こちらは未だ大学院の学生だった時期で、小さな研究会で一緒にさせていただいたのでした。その時は、先生との出会いが、自分の人生を大きく動かすことになるとは、思いませんでした。その後、長岡の大学に誘っていただき、アジア工科大学への派遣を推薦していただき、学会の編集委員会に加えていただき、という具合に、先生に引き立てていただきことで、多くの貴重な仕事の機会を得ることができました。師弟関係というほど年は離れていないのですが、誰もが持つ数少ない人生の師のひとりが、私にとっては渡邊先生でした。いろいろなことを指示され、満足に果たしていません。気にしておられた、故高山英華先生と故奥田教朝先生の蔵書は、東大都市工学科の貴重な図書として整理しています。都市計画の再興については、未だですが、忘れてはいません。

9月8日の告別式は悲しい日でしたが、ご長男が、「父は、定年になったら、東大に学士入学して万葉集を勉強したいといっていたので、関係の本を持たせました」とご挨拶されるのを伺いながら、救われた気になりました。観光計画学は、必ず跡を継ぐ人が現れて、この国の光を見せるために発展します。貴介さん、安らかに。